



新設された第3栽培室

記者会見 左から平出取締役、鈴木社長、倉持専務、渡辺係長



収穫作業

120tの生産、売上1億円を目指す

スズテックは、1月29日、栃木県宇都宮の本社で記者会見を開き、豆苗栽培を行う第3栽培室を1月から本格稼働したと発表した。昨年8月に新設されたアグリ事業部が豆苗栽培の事業を担い、これまで栽培を行ってきた第1、第2の栽培室と併せて年間120tの生産、1億円の売上高を目指す。



第3栽培室の中



収穫を待つ豆苗

記者会見には、鈴木直人代表取締役社長、倉持久夫専務取締役、平出武取締役アグリ事業本部長、渡辺健二アグリ事業部係長が出席。冒頭、鈴木社長が挨拶に立ち、同社豆苗の特長、事業の方向性を示し、続いて平出取締役が今回お披露目となった第3栽培室の概要を説明。最後に倉持専務が豆苗事業の沿革について述べた。また説明の後は実際の第3栽培室において同社製収穫機による収穫作業を公開。生産性の高い効率的な作業を印象づけた。

同社の豆苗栽培は、平成3年にスタート。21世紀に向けた事業拡大の第1弾として取り組みが始まった。豆苗はエンドウ豆の若芽10cmぐらいを摘み取ったぜいたくなもので、中国宮廷料理にも使われ、また食物繊維、ビタミン、カルシウ

ム、リン、鉄などのミネラルが豊富。健康食としても注目されていた。その高い付加価値に注目して事業化を決断。それまで培ってきた水稲育苗播種機関連技術を応用し、栽培システムが開発され、工場内にモデル栽培施設を設け、実際に生産を行い、東京方面のデパートや大手スーパーへの販売を開始した。しばらくは、野菜としての知名度が低く、販売促進の実態は、豆苗の普及活動そのものとなったが、徐々に認知が拡がり、同社の無肥料・完全無農薬で栽培される豆苗のファンも増え、市場筋によると「横浜中華街での同社豆苗シェアは50%」にまで達している。当初の目的は自らが生産・販売を行い、豆苗栽培の収益性を実証し、栽培システムの実用性をアピールすることだったが、それを十分証明した上で、自らが生産販売する事業に力を入れ、今期は生産量100tを目指すまでになっている。現在同社の豆苗は“若摘み豆苗”の商標で東京の大田市場を始め

とした市場出荷をメインに、中華レストランや直売所へ、鮮度重視で出荷されている。その特徴は、①無肥料・無農薬で一切土を使用せず、水のみで栽培し、安心・安全、②葉っぱがしっかりと開いてから収穫するので非常に柔らかく、上品な甘みと香りがあり、リン・鉄・カルシウム・ビタミンCなどが豊富、③カット野菜のため、廃棄する部分がなく、調理の手間が掛からない、④ハウス栽培のため、天候などに左右されにくく、計画的な栽培・収穫が可能で、年間通じた安定供給ができる、などで今後はこれまで培った、生産ノウハウを活用し、合理的な豆苗生産に取り組み、また合わせてブランド化を進め、競合他社との差別化を図り、次期以降の中期目標「生産量120t・売上金額1億円」に向けて事業を展開するとしている。

その目標を実現するために欠かせないものが、今回お披露目された第3栽培室で、昨年12月に完成し、テスト運用を経て、



鈴木社長（左）と平出取締役

本年1月より本格稼働を開始した。高さは低い所で3m、高い所で4m以上あり、栽培の難しい夏場の暑さ対策に対応。またハウス内温度に対応して自動で天窓が開閉し、作業の省力化、効率化が図れる。昨年8月に新設されたアグリ事業部では、4人の社員、16人のパートで豆苗事業に係る業務全般を担当し、年中無休の出荷をはじめ、種子の購入・保管、生産管理、販路拡張・配送全般などの販売管理、栽培技術・生産性向上を目指した改善活動等を行い、高まる需要に対し、「安心・安全な豆苗を年間通じて安定的に生産しお客様に提供していく」としている。また第3栽培室新設に伴う生産量の増加に対応するため、袋詰・梱包作業室や出荷前の冷蔵保管室等の増設・改修、また

市場への出荷専用コンテナ車を導入。配送工数の低減を図っていく。また栽培面では、これまでの栽培記録等を集約し、データ化する他、毎日の栽培室内外の温度・湿度・栽培ベットの水温等、各栽培室の環境が異なるためデータを収集するなどして、様々な条件の中で対応できるように栽培技術の向上に取り組んでいく。

◆第3栽培室の概要

▷ハウス；面積＝1000㎡（303坪）、寸法＝8.5m×50m（2連棟）、※第1・2栽培室を含めると2742㎡。

▷栽培面積＝855㎡（259坪）

▷栽培方式＝水耕栽培（底面灌水）・完全無農薬

▷最大収穫量＝40t/年

▷設備＝水耕用ベット16台、搬送コンベア2ライン、暖房機



1台（ネボン製）

▷ハウス仕様＝ハウス内をコントロールする統合環境制御盤があり、寒冷紗・保温ビニールカーテンは設定温度・時間による自動開閉制御、天窓はハウス内温度、雨感知センサーによる自動開閉制御が行える。

▷その他＝外部のビニールフィルムはフッ素フィルムを使用。露地栽培とほぼ変わらない光をハウス内に採り入れ、安定した周年栽培ができ、また20年経過しても殆ど劣化が見られず、耐久性に優れる。メンテナンスが軽減し省力化に繋がる。